

## 第3回 小金井市産業振興プラン策定委員会 議事録

日 時 令和3年9月23日(木) 午後6時～午後8時  
場 所 小金井市市役所第二庁舎8階801会議室  
出席委員 10人  
委員長 中庭 光彦 委員  
副委員長 斉藤 浩 委員  
委 員 清水 薫 委員 高松 結花 委員  
田中 千鶴枝 委員 西川 亮 委員  
大坪 正直 委員 山城 裕路 委員  
今井 啓一郎 委員 鴨下 勇司 委員  
欠席委員 森 文香 委員

---

事務局 経済課長 高橋 啓之  
産業振興係長 鈴木 拓也  
株式会社国際開発コンサルタンツ 氏原 茂将

---

傍聴者 3人

### 議事

#### 1. 開会

#### 2. 議題

##### 産業振興プランの体系及び推進事業の整理について

事務局が、資料1を用いて前回プランの取組に関する考え方を説明した。

##### まちの活気について

中庭委員長 資料1では、前回の委員会で出たまちの活気に関する意見が5つにまとめられているが、そのうち「人と人との関係が深いこと」と「まちを盛り上げる人が多いこと」は、まちの活気をつくる資源である。この資源を活かし、「ブランドがあること」「暮らして楽しいこと」「安心して出かけることができること」が結果として生み出されるという区分けができる。資源を結果に結びつける取組が必要である。そのような整理をした上で、まちの活気がどのようなもので、どうすれば生まれるのか議論を深めたい。

西川委員 都市計画やまちづくりの専門なのでハードの観点から考えた。ソフトの受け皿となるハードを整備することで資源を活かせるだろう。行政が保有する公共空間と、私有空間の両方のにぎわいをつくっていくことが重要だと思う。公共空間における活気については、そこでアクティビティが行われている必

要があるが、そのためには安全性が前提になる。安全な空間を設えた上で、高齢者も出歩きたくなるようなアクティビティがあり、さらにアクセスする交通手段があることも必要だと思う。

私有空間については個々の商店がにぎわっていることが必要である。武蔵小金井駅周辺の土地利用の変遷を調べたが、以前は農工大通りや小金井街道沿いには商店が多かったのだが、徐々にマンションやビルに変わっていく様子が見られた。駅前再開発で商業施設ができたこともあって、個人商店が閉まっていったのだと思う。小さな商店が生み出すにぎわいが大切だと思う。一方、武蔵小金井駅の北側には大きな農地が残っていることが特徴であり、今後も、そのような土地が残っていくことも大事だと思う。

高松委員 活気のあるまちからは、まちを歩く人々が笑顔でいたり、お店の人とお客さんが談笑していたりするような景色を思い浮かべる。お祭りなどのイベントに参加したことはないが、にぎわいになるものだと思う。

清水委員 第5次長期総合計画で示された目指す姿では、冒頭に「多様」という言葉が使われている。まちの活気が多様であるとは何かというと、世代だけでなく、性別、国籍、障がいの有無など、様々な人がまちにいるイメージだと思う。様々な人が活動をするまちになると、活気生まれていくのではないかと思う。

中庭委員長 「多様性」は重要なキーワードである。小金井市で消費意識やライフスタイルなどの多様さを商業者に具体的に伝えるにはどうすればいいのか。多様性を守るため、受け止めていくにはどのようにすればよいと思うか。

清水委員 お祭りなどの催しを見える化していくといいのではないか。SNS 等はもちろん、偶然市民の目に入るように情報を発信していくことも必要である。

中庭委員長 催しというのは伝統的なお祭りにかぎらないのか。

清水委員 大々的にやるのもいいが、自分がつくったものを出店できるイベントのような、小さな発信でもよいので、いつも何かをやっているような様子が見えるといいと思う。

中庭委員長 そういった活動が見える化されると多様性につながっていくということだと理解した。

田中委員 目標を1つに決めるのは難しいため、多様であるということを目標に掲げられるとよいと思う。多様性を見える化すれば市民に広がっていくと思う。

気になっているのは、第5次長期総合計画の目指す姿が抽象的であることだ。総合計画は幅広い分野の取組をまとめるので仕方ないと思うが、産業振興プランの目標は、この委員会で具体的に考え、決めてよいということか。

中庭委員長 そのように理解してもらってよいと思う。

田中委員 まちの活気は産業に限定されないと思うが、どのように議論したらいいのかイメージできていない。

中庭委員長 一人ひとりがイメージするまちの活気は異なる。そのため一人ひとりのイメージを共有しながら議論している。

田中委員 産業と商業を前提としてまちの活気を議論しているという理解でいいか。

中庭委員長 たとえば、極端な例だが、外出せずにネットを通じてコミュニケーションを

人ばかりになると活気がないように感じると思う。ただ、その人たちはネットを通じてまちの商店で消費はしているとする。それをまちの活気と言うべきかどうか。

- 田中委員 それはまちの活気とは言えないと思う。難しさを感じている。
- 中庭委員長 難しいので、みなさんで意見を出し合って考えていきたいと思っている。
- 田中委員 自分の地元では、お祭りはみんなが知っていて、それに合わせてみんなが行動をしていくので、かなり一体感がある。小金井市のお祭りを知らなかったのだが、こんなに多いのかと思った。まちのみんなが知っているイベントがあることは大事だと思う。
- 中庭委員長 地方では、お祭りのなかで商店と住民のあいだに助け合いの関係が生まれて、その助け合いのなかで稼いでいるという状況がある。東京ではそうっていない。商店街と住民がどのようにつながるのが課題だと思う。これまでの議論を踏まえると、多様性を増すため、地域のお祭りを見える化することでお互いのかかわりが見えるようにするというアイデアをいただいたと思う。
- 大坪委員 小金井市に25年ぐらい住んでいるが、昔の方が地域のつながりがあったと思う。再開発が進んでいくなかで人と人とのつながりは薄れてきているが、再開発ビルのテナントではお金は使われている。最近ではK0-T0ができて小さな企業もできてきている。地域で活動する団体も多い。ただ、地域での経済が生まれていない気がする。地域経済につながる産業振興を考える必要があると思う。そのためには基盤となるもの考えるべきだと思う。小さな活動をしている人たちが地域で力をつけていくための基盤づくりが課題だと思う。以前は商店会や自治会が基盤だったのだと思うが、いまはその代わりをつくらないといけない。
- その足枷になるのはやはりお金である。小金井市はテナント代が高いのでビジネスを始められない。その後押しが必要である。K0-T0は創業を支援しているかもしれないが、その後の支援も必要だと思う。
- 農業振興計画でも議論したが、市場に出荷できない野菜を飲食店で使ってもらうぐらいで終わっていて、野菜をビジネスの種にするための議論になかなかならない。ビジネス化を考え、実行するための基盤も必要だと思う。
- ただ、農業者や商業者が自ら基盤をつくろうとしても、金銭的な見通しがないと始められないし、続けられない。そういったことこそ公共的な団体が担ってもらいたい。たとえば、保健センターの跡地を活用し、非営利団体がビジネス創出や発信の基盤づくりをしてみたらよいと思う。
- 中庭委員長 そういったことをチャレンジすることが大事だと思う。資金の話があったが、どれぐらいの規模感と考えるか。
- 大坪委員 資金調達をしてしまうとお金に縛られる。ビジネスにはならないと思っているので、営利を目的とせず、地域に対するプライドのようなもので動けるとよいと思う。非営利で回していくことが大事だと思う。
- 中庭委員長 つなぐ役目が大事だということか。
- 大坪委員 地方で民間事業者が道の駅をつくる例もあるが、自分は道路公団やJAのよう

な公共的な団体が運営する方がよいと思う。売上を目標にするのではなく、地域のテーマに沿った運営ができる。

- 鴨下委員 農業はたしかにテーマが弱いし、発信もできていない。
- 中庭委員長 小豆島のジェラート屋が地元のくだもののB品を買って、ジェラートとして観光客に向けて売っていた。そういう仕組みができることが、冒頭に話した資源と結果をつなげるということだろう。
- 大坪委員 そのようなつなぎを団体が担えるといいと思う。個々の活動で終わってしまうことが多いように思う。
- 鴨下委員 自分がつくる農産物は買ってもらっているので、個の活動はできていると思う。だから、個と個をつないで、団体のようなかたちで取り組んでいけるとよいと思う。
- 中庭委員長 いま議論している団体は、まちづくり会社とも違うものだと思うが、何と表現すべきだと思うか。地域商社といった組織のあり方もあるが、どうか。
- 大坪委員 名称は分からないが、人の魅力を発信するまちになればいいと思う。
- 鴨下委員 小金井市で農業をやっていることに誇りを持っている農業者は多い。産業としては小さいし、農地があることも認知されていないが、がんばっている人は多い。利益はそれほど大きくないが、人と人の関係性をつくる上で、農業者と観光まちおこし協会の連携はよい事例だと思っている。地味ではあるが、継続していくことで影響をもたらすのではないかな。
- 今井委員 小金井市は昔からお祭りが多い。コロナ禍ではお祭りはできないが、お祭りをすることで横のつながりをつくっていけると思う。
- 今井委員 商店街の活性化が大事だと思う。商店街が元気になれば、この委員会でまちの活気として語られてきたことは実現されると思う。商店街の活性化に向けて、組合の事務局が機能するように行政が支援することがあってもいいと思う。現在のプランでは「イベント開催のような単発的な取組から脱却し、持続的な商店街振興につながる仕掛けづくりが課題」と書かれているが、その対応になるのではないかなと思う。
- 中庭委員長 商店街がにぎわっていない理由は何だと思うか。
- 今井委員 事務局機能が弱いためだと思う。商店街活動のアイデアはあると思うが、事務局機能が弱いため実行できていない。だから事務局への支援をしてもらいたい。
- 中庭委員長 個々の商店もがんばる必要があると思うが、いかがか。
- 今井委員 川に魚が泳いでいないといけない。その魚を釣るかどうかは個々の商店の問題だと思う。もちろん商売を続けてもらいたいので、商店街でも個々の商店の支援は行っている。継続が難しく、ビルに建て替えられる場合も1階はテナントにしてもらうように働きかけてもいる。
- 中庭委員長 強制はできないが、学習塾に貸すのではなく、他の商店などに誘導するのは大切だと思う。
- 今井委員 ブランドは後からついてくるものだと思う。市外から人を呼ぶ前に、市内に住んでいる人が買い物してもらえないと、市外から人を呼べないと思う。ま

ずは住民に買い物をしてもらえるようにすることが大事で、市外から人を呼ぶことはプラスアルファだと思う。

山城委員 今日議論自体に価値があると思う。まちのことを考えて、動いている人がいることを知らない人が多いと思う。商店街のことも、お祭りをやってくれていて、楽しく消費するだけで終わると思う。でも、商店街の人はまちのことを考えてやっている。それを知ってもらって、輪に入ってもらえるようになればいい。お祭りなどの活動がもっと知られる必要があると思う。

農業も同様で、ただ農業をしているというだけでなく、思いを持って農業をしている。小金井をよくしたいと思ってやっている人を知ってもらい、その活動に住んでいる人を巻き込めないかと思う。

今井委員 市報に商業や農業のことを発信してもらえないのか。地方のローカル新聞ではまちの商店を紹介しているので、そのようなイメージで市報をうまく活用できるといい。

大坪委員 古くから住んでいる人たちはお祭りがあることを知っていて、熱い思いを持っているが、移住してきた人はお祭りのことを知らない。知らないから参加しないし、参加しないから横のつながりができない。何かきっかけが必要なのだと思う。商店街は大売出しばかりやってきたが、それでは売人と買う人の関係にしかない。たとえば子どもを通じて地域に入っていくようなきっかけとなるイベントがあってもいいのではないか。

斉藤副委員長 商店街では小売店は少なくなり、飲食店とサービス業がメインになっている。お客さんと店頭で接する機会が少なくなっている。小売店もチェーン店が多くなっており、販売する人は市民ではなくなっている。それではコミュニティをつくることは難しいと思う。ただ、個人の小売店が復活することは難しいと思っている。それでは、飲食店とサービス業がメインになったまちが、どう元気になるのか。必要なのは能動的に動く人だと思う。そのような人がどれだけまちにいるのかが肝心なのだと思う。以前やっていた商い倶楽部のように、いろいろな団体からがんばっている人を推薦してもらって、集まる機会をつくってもいいと思う。がんばっている人が分野横断的につながるチームができればいい。お金は出せないと思うが、場所を提供するなどの支援があれば継続的に集まることができ、何か動きは生まれていくと思う。新しい人を取り込んでいくには、以前は夢プランといって企画提案に対して民間企業が助成金を出してくれた。そのような制度があって、毎年1人ぐらいの活動を後押しすれば人が育っていく。農業でも、子育て支援でも、分野を限らずにやっていけるといいと思う。

元気な人が育っていく組織があると、だんだんとまちを元気にしていけると思うので、おもしろい人が集まる会をつくっていいとよい。

中庭委員長 おもしろいというのはいいキーワードだと思う。儲けようとするよりも、おもしろがってやるのがいい。

前半の議論は、資源を結果に変換するために必要なこととは何かからはじまった。まとめると、①多様な商品、業種、ニーズをつなげていく仕組み、②評

判や信用を生むブランディングのための仕組み、③まちのネットワークに参加しやすく、また新たにネットワークをつくり、住民を巻き込んでいくための仕組み、④商店街のような様々なプラットフォーム、⑤人を育てていく仕組みや場、その人たちの新しい事業に資金を提供していくための仕組みとなる。資源と結果に変換するために、この5つの仕組みづくりを行う必要があると仮説とし、プランに記載するべきであるという認識でよいか。

齊藤副委員長 小金井は住宅地なので、観光と言われると疑問を持つ。ハレのまちではなく、日常生活のまちで、平々凡々な感じでちょっとした楽しみを感じるまちでいいのではないかと思う。普段の生活が楽しめるぐらいがいい。

中庭委員長 生活のハレ化ということか。

齊藤副委員長 それが飲食店やサービス業の生きていける道かと思う。

西川委員 観光の捉え方には賛成である。日常のハレ化という認識がよいと思う。

### 必要な取組について

西川委員 地域の魅力や商店街の活性化にくわえて、市民がアクセスする仕組みが必要だと思う。先ほど住民が第一という話もあったが、三市魅力向上プロジェクトを踏まえて、住民の範囲を広げてもいいのではないか。三市魅力向上プロジェクトは中央線でつながっている地域が対象だが、それ以外の交通手段として自転車につながる地域もあると思う。市を挙げて自転車利用を盛り上げていくのはあり得るのではないか。シェアサイクルが増えているが、小金井市では取組がない。魅力をつなぐ交通手段を考える必要はあると思う。

高松委員 情報発信全般について、いまの市報は情報がただ並んでいるだけで味気ない。市内でがんばっている人を紹介すると、横のつながりができていくのではないか。市報を使うことが難しいのであれば、観光まちおこし協会が発行する媒体を活用してもいいかと思う。駅で配布するのもよいが、駅利用者が減っているので各戸に配布する方がよいと思う。

小金井野菜を食べられる店が増えるといいという話をしたが、そのときイメージしていたのは市内のピザ屋だった。小金井野菜の魅力を伝えていて、他のピザ屋よりも愛着を感じた。そういった飲食店が増え、さらに周知されるといいと思う。そういったブランドマークがあるといいと思う。

パパママにやさしいまちになればいいと思う。ベビーカーでも安全に通ることのできる道路整備は進めてほしいが、ベビーカーで入れるお店をPRするもいいと思う。親にやさしいまちという印象が生まれる。

清水委員 市民がやりたいことを発表する場があるといいと思う。まち全体で応援するような機会になると思う。

熊谷市の青年会議所でチェアリングをやっている。椅子を持って出かけて、自由に座れるようにする取組である。このような日常生活のなかでできることを提案するのはよいと思う。

田中委員 生活しやすく、日常が幸せなまちはいいと思う。そのためには道路が安全である必要があると思う。歴史あるまちなので幅員が狭いことは仕方ないが、

危ないところが多いので、その点については対応してもらいたい。

元気な人を応援すれば、元気な人がどうにかしてくれそうなので、そういう施策があればいいと思う。

大坪委員 たとえば農家の方に生姜をつくってもらうように頼み、生姜の商品を開発すれば、まちの魅力になる。それを扱うアンテナショップがまちのコンシェルジュになっていければ、まちの魅力が発信できるようになる。潜在的な魅力はたくさんあると思うので、それを発信できればよい。

山城委員 農工大・多摩小金井ベンチャーポートは工業分野の事業者が入居しているというが、地元にはその情報が入ってこない。つながることができるのかどうかはもとより、そもそもどういった活動をしているのか情報発信をしてもらいたい。

市民に対しては情報受発信事業が大事だと思うが、ホームページは見づらくて、興味を喚起しない。若い人が興味を持つような発信ができるといいと思う。プロモーションが得意な事業者に協力してもらってもいいと思う。

中庭委員長 ベンチャーポートについて何か説明できるか。

事務局 入居している事業者は先端的なことをやっている事業者が多い。おもしろい人が集まっているのは事実である。現在 11 社ぐらいが入居しており、100 人ぐらいの雇用がある。

斉藤副委員長 小金井市民が働いているのか。

事務局 市民に限らないが、近隣に住んでいる人と聞いている。規模が大きくなってベンチャーポートを卒業するタイミングで、市内で操業する土地が見つけれないために、市外に出ていかざるを得ないと聞いており、課題に感じている。市内定着に向けては、農工大の校舎の空いているスペースを使ってもらうことも検討している。

地元との交流としては、商工会ともセミナーで交流を続けている。武蔵野エリアの産業フェスタにもベンチャーポート入居者に参加してもらっている。

中庭委員長 以前にベンチャーポートを取材したことがあるが、そのときは、農工大の技術を学外に出すことが目的の施設という印象だった。山城委員の問題意識は、農工大ベンチャーポートの入居者の技術と小金井市内の技術を結びつけるようなことができるのかどうかということだと思う。その点についてはいかがか。

事務局 当初は学内の研究知見によるインキュベーションを目的としていたため、農工大発のベンチャーが入居していたが、最近の入居者はそうではない。地域とつなげるというよりも、グローバルな視野を持っている印象である。

山城委員 小金井市が財政的な支援をするのであれば、地域とのつながりがあった方がよいと思う。

今井委員 ベンチャーポートが地域の活性化につながらないのであれば再考した方がいいのではないか。K0-T0 のような創業支援も同様だと思う。支援した事業者の小金井市への定着が難しいのであれば、小金井市が支援する必要はないのではないか。

- 中庭委員長     ベンチャーポートについては検討いただきたい。
- 鴨下委員     農業は知名度が大事だと思う。市報で農業についてPRするようなことも含めて、情報発信が必要だと思う。
- 今井委員     おもしろい人が集まる場があって、本当におもしろい人と直接やりとりができて、活動ができるといいと思う。その場に集まる人たちが、自分の所属する組織などのことを気にせずできることが大事だと思う。
- 斉藤委員     情報受発信が大事だと思う。5年ほど前に小金井市観光まちおこし協会を立ち上げたときには中間支援と情報受発信を重視していた。市内事業者を対象としてアンケートを取って必要な取組を聞いたところ、自分たちが発行するチラシを配布する場所をつくってほしいという要望が多かった。それを踏まえて駅にチラシを置けるようにした。今後はSNSに力を入れないといけないが、使うセンスが求められる。そのようなスキルを持った人をつながることが大事だと思っている。
- たとえば小金井のwikipedia「コガペディア」をつくって、そのサイトを見れば、小金井市のことが分かるようになるといいと思う。

### 3. 閉会